総　説

感情の表出と理解に関する展望

小林　真*

Review of Expression and Perception of Emotion

Makoto Kobayashi*

Abstract

Emotion expression and perception are important in interpersonal communication, and they are essential components of social skills. In this paper, studies of emotion expression and emotion perception are reviewed. Studies of facial perception revealed that young children could well recognize a happy face, but could not recognize a sad or frightened face. Similarly, studies of facial expression revealed that young children could make happy and surprized face but could not make frightened or disgusted face well. Vocal perception studies indicated that negative emotion (i.e. anger and disgust) were well recognized. There were small studies in the area of vocal expression, so how vocal tone conveys emotions was not revealed. Finally, research into perception and expression of emotion of people with mental or developmental disorders were reviewed. The necessity for training emotional comunication skills to such people is proposed.

Key words: emotion expression, emotion perception, social skills

1．感情の適応機能と伝達機能

戸田（1981）は，感情（情緒）には行動を活性化する機能があり，それはヒトが野生環境の中で適応的するために進化させてきた行動解発プログラムであると述べている。たとえば，補食者に襲われた際に生じる恐れの感情は，闘争もしくは逃走という行動を動機づけるものと考えられている（Gray, 1987)。また，縄張りの侵入者に対する怒りは，攻撃行動を解発する。このように，感情によって起動された行動プログラムは，生存のために有効であったものと思われる。戸田（1992）はこれを感情の野生合理性と呼んでいる。

しかし感情は，個体の生存に関わるこのような適応行動の解発と同時に，他者に対するメッセージ機能を有している。たとえば，怒りの感情表出は縄張りに侵入してきた他者に対する威嚇・警告のメッセージである。そして，これに対する恐れの表出は，攻撃を避けるための謝罪行動としての意味を帯びている。このように，本来は闘争／逃走行動を解発していたはずの情動も，自己保存と

*人間健康科学科　　*Department of Human Health Sciences

同時に相手もしくは集団を維持するためのコミュニケーション機能を持つようになっている。

さらに，喜びや悲しみといった感情は，それ自体は行動解発機能を持たないが，これらの感情を表出することは，自分の要求を表現したり，他者との関係を調整するといった，集団内のコミュニケーションを円滑に進めるために機能している。すなわち感情をどのように表出するか，表出された感情をどのように受け止めるか，といった感情のコミュニケーションが，人間の社会生活の中で大きな役割を担っているといえる。

人がもともと持っている基本感情（basic emotion）は何か，という問いに関しては，未だ結論はでていないが，山田（1993）は比較文化的研究および比較行動学的研究を展望して，6つの基本表情カテゴリーがあると述べている。すなわち，嬉しさ，悲しみ，驚き，怒り，嫌悪，恐れである。

Ekman & Friesen（1975）によれば，それぞれの感情の内容は以下の通りである。嬉しさ・幸福感は，快感・安全の感覚，あるいはより高次な認知である望ましい自己概念などに結びついて生じる。悲しみは受動的な感情で，喪失に伴って生じる感情である。驚きは，予期しない事態および予期に反した事態に対して生じる感情である。怒りは，活動や目標追究に対する干渉（フラストレーション事態）に対して生じる。また，身体的な脅威・精神的な危害（侮辱・拒絶など）が加えられた場合にも生じる。さらに，より高次な認知として道徳観を誰かが侵害した場合にも生じる。恐怖は，苦痛や身体的危害などに対して生じる感情である。

ヒトという種が持つ基本感情がある程度普遍性を持つのであれば，感情の表出のされ方も種に共通しているのであろうか。Ekman & Friesen（1975）によれば，感情は万国共通の表情で示されるものであり，ヒトという種が基本的に持っている感情は共通するという。比較行動学的研究によれば，眉毛を釣り上げる動作は，相互作用の用意があることを意味し，微笑は攻撃的でないことを意味している。これらは様々な文化に共通してみられる表情である（Eible-Eibesfeldt, 1980）。

しかしEkman & Friesen（1975）は，他者の前で感情をどのように表出するか，という表示規則と呼ばれる部分が文化・教育によって異なっているのだと述べている。荘厳（1993）は，アタッチメントの研究を概観し，日本とアメリカでは母子の分離や再会の場面で反応のしかたに違いがあることを見出している。荘厳（1993）は，母親の養育行動を通じて，その社会が持っている対人関係のあり方が子どもに伝わり，情動という情報の伝達システムが異なってくるのではないかと指摘している。

ところで，前述したように個人がある感情を感じ，それを自然に表出する際には，表出のしかたに差はみられないが，ひとたびそこに他の誰かが存在し，その人に向けて（意図的に）メッセージを送ろうとした場合には，表出のしかたに文化の違いが生じてくる。それぞれの文化で，"他者の前"という状況に合わせて感情の表出をどう変えるかという暗黙の規則を表示規則という。したがって，伝達機能としての感情表出とは，人前であるという公的自己意識が喚起された状態において明らかになるものである。そして，それを読み取る側は，その状況に合わせて相手の表出した感情表現を読み取るのである。これを解読規則という。

社会心理学の立場では，社会的スキルとは主に非言語コミュニケーション能力を指す（Argyle, 1983）。大きく分けると相手のメッセージを正しく理解する過程（decoding:解読）と，文脈に応じて自分から適切にメッセージを発信する過程（encoding：表出）からなる。こうした能力が，人間関係を構築したり維持していく上で必要なことはいうまでもない。堀毛（1990）は，解読能力と表出能力に焦点を絞った尺度を作成している。また，和田（1993）は非言語コミュニケーション能力に関する尺度を作成している。

小林（1994a）は，幼児を対象に，表情と声の抑揚，身振りなどの表出能力とソシオメトリーとの関連性を検討している。男児では，声量が大きくはっきりしている場合に，ソシオメトリー評定値と中程度の正の相関がみられた。また，これら非言語コミュニケーション全体についての総合的な印象評価も同様に正の相関を持っていた。これに対して女児では，声量はソシオメトリーの肯定的

指名数と有意ではないが負に相関しており，総合的な印象評価も肯定的指名数との間の有意傾向の負の相関を有していた。また，人前でもじもじするような，不安そうなしぐさの多い女児は，肯定的指名数とやや高い負の相関を示した。なぜこのように性差がみられたのかについてはまだ解明されていないが，少なくとも非言語的な表出能力が仲間関係と関連性を持っていることは確かであろう。

感情を伝達する場合に，その主要な媒体になっているものが，表情と声である。そこで，次節以後では表情と声がどのように感情を伝えているのかについて，いくつかの研究を紹介しながら考察する。

2．表情による伝達

表情表出に関しては，Ekman & Friesen(1975)の広範な研究がある。彼らによれば，顔によって伝えられる情報には，皮膚の色・骨格など静的なもの，皺や膚の張りの変化といった非常にゆっくりと変化するもの，そして顔面筋の動きによる急激な変化の3つの信号があるという。筋肉の動きによって伝えられるものが感情メッセージである。なお，Ekman & Friesen (1975) の用語に従えば，ムードとはある程度の時間持続するもので，エモーションとは持続時間の短い急激なものとして分類されるものである。

既に述べたとおり，Ekman & Friesen (1975) は，文化に規定されない基本的な情動表出メカニズムを仮定している。こうした表情表出が生得的なものであるならば，表出に対応した理解の能力もヒトには備わっているものと考えられる。表情理解の能力は，誕生後早期に既に見られるが，全ての感情が同じように理解されるわけではない。

桐田 (1993) は，表情理解の研究を展望しているが，生後10週で既に理解できるようになるという見解や，微笑みと悲しみの弁別が4ヶ月で可能になるという報告などがあり，一致した見解は得られていないという。しかし，およそ6ヶ月の時点では，視覚による表情のカテゴリー化が可能となると考えるのが妥当であろう。また，驚きや悲しみがこれに続くといわれている（桐田，1993)。

幼児期から児童期，あるいは成人までを対象とした表情理解の発達的研究では，いずれも楽しい顔・幸福顔の理解がもっとも早期に確立されることがわかっている。

石川・浅井・越川・竹内 (1994) は，肯定的な文章と否定的な文章を，表情・口調を変えて幼稚園の年長児と大学生に聞かせ，それが肯定的な印象を持つか，否定的な印象を持つかの判断を行わせた。その結果，幼児では成人に比べて，相対的に肯定的な感情であると評価する傾向がみられた。特に，言語内容あるいは表情が肯定的であると，肯定的な判断に結びついているようである。

水品 (1992) は，幼稚園年中児，小学1・3年生を対象に，絵カードを用いて，表情と状況の手がかりから，子どもがどのように感情を推測するのかを検討している。喜びの表情は年中児で既に100%完成していたが，怒りの表情は10%程度の子どもが誤答していた。また，悲しみの表情が理解できたのは年中児では50%弱で，その後3年生にかけて理解が上昇しているが，それでも90%弱であった。恐れの表情は，幼児では10%程度で，3年生でも50%弱の正答率であった。こうした結果から，楽しい表情はもっとも早く理解可能で，怒りがこれに続き，悲しみや恐れは表情からの理解がなかなか確立しないことが推測される。

これに比べて，状況からの理解は，悲しみではいずれも表情による理解度を上回っている。表情の理解がもっとも悪かった恐れの感情では，状況の理解は3年生では90%近くに達しており，こうした結果を見ると，幼児や児童が感情そのものの理解はできていることがわかる。すなわち，どのような状況でどのような感情が生じるか，という感情が喚起された体験は持っており，状況から相手の感情を推測することはできるのである。

表情の表出に関しても，同様のことが示されている。Lewis, Sullivan & Vasen (1987) は，幼児から成人までを対象に幸福・驚き・悲しみ・恐れ・怒り・嫌悪の表情を意図的に作らせ，表出された表情の完成の程度を評定している。その結果，幸福・驚きの表情表出は3歳から可能であるが，悲しみ・怒りの表出は4歳児でも完全ではない。さらに，恐れ・嫌悪の表出は成人でも困難な者が

多かったという。

水品（1992）の感情理解の研究では，驚きと嫌悪の表情は調べていなかったが，この2つの研究に共通するのは，喜び・幸福の顔は理解も表出も早い時期に獲得され，怒り・悲しみがそれに続き，恐れの表情は理解も表出もかなり難しいということである。

小林・松尾（1994）は，5・6歳児に対して，他者の見ている前で様々な表情の表出を行わせ，ソシオメトリー評定値との関連性を検討した。その結果，男児については楽しい顔の表情をうまく表出した者は，ソシオメトリー評定値が高い傾向が示された。しかし，女児では表情とソシオメトリーの間に有意な相関は見出されなかった。なぜ性差がみられたのかについては，今のところ不明であるが，少なくとも笑顔の表出が仲間関係に影響している可能性はあろう。

喜びと怒りの感情が早くから理解されるということは，それが他者に対するメッセージ性を帯びているためであろう。母子の微笑は誕生直後からみられるもので，異論もあるが（Bower,1979），ヒトが生得的に社会的な動物であることの証拠であると考えられている。すなわち，誕生直後から，母親の微笑は子どもにとって栄養や身体接触・安全などと結びついた快の信号であり，子どもの微笑は母親にとって適切な育児が行われたことの信号となっている。また，怒りは，子どもにとっては不快な刺激で，現在行っている行動を制止する役割を持っている。このように，喜び・幸福と怒りの表出は，かなり早期からみられるコミュニケーションであるといえよう。これに対して，悲しみや恐れの表情がなかなか理解されない，あるいは表出されないという現象は，(少なくとも表情に関する限り）これらの感情が他者に対するメッセージ性が低いためであると考えることができよう。

ところで，鈴木（1991）は，大学生15名に12種類の感情の表出をさせ，その表情を撮影した写真（12の感情×15名分）がどの感情を表しているかについて15名の被験者に判断させた。その結果，悲しみと驚きの表情の判定率が高く，楽しみや幸福については，一致率はそれほど高くなかった。また，恐怖，嫌悪，憎悪などの表情は判定率が低かった。この結果は，先の諸研究の結果に反するものである。欧米の研究で用いられた写真は，かなりはっきりと表情が表出されていること，子どもを対象とした発達的研究では多くが典型的な絵カードを用いていることに比べ，鈴木（1991）の研究では，大学生が実際に表情を作っている。したがって，日本人の表情表出は典型的な強い表情ほどはっきりしていない可能性も考えられるが，先行研究との不一致は今後検討すべき問題ではある。

3．音声による伝達

表情の理解と表出の研究に比べ，音声による感情情報の伝達に関する研究はまだ多くない。特に，感情理解の研究はあるが，音声表出の研究は皆無といってよい。

青木（1993）は，大学生を対象として，言語的な内容と音調が一致した文章と不一致な文章を聞かせ，その再生成績や，内容の理解度を調べた。その結果，否定的な内容が否定的な口調で伝達されると，メッセージの再生成績がよかった。この研究で再生成績に関与していたのは，理解度（よくわかったという主観的評価）に加えて，口調と内容が整合していたという印象である。また，肯定的な文章を肯定的な口調・否定的な口調のどちらで読んでもあまり整合性の評価に影響を与えないが，否定的な文章を肯定的口調で読まれるのは非常に整合性が悪いという印象であった。否定的な文章を否定的な口調で読んだ場合は整合性がやや高く感じられるという。したがって，否定的な感情を伝えるためには，口調の変化が大きな役割を担っている可能性が考えられる。

石川・越川（1993）も同様の実験を行っている。彼らは，大学生に対して，言語的な内容と表情，口調という3つの要因を組み合わせてメッセージの理解を検討している。その結果，以下のようなことが示された。聞かされたメッセージが全体として肯定的であったか否定的であったかという印象に寄与するのは主として表情である。すなわち，表情が肯定的であると，その表情に基づいて肯定的な印象をもつようになる。しかし，表情が否定的である場合には，口調や内容によって印象判断

が行われている。

越川・向後（1994）は，音声による感情理解を3次元からなる意味空間内で分析している。第一の次元は快－不快，第二の次元は表出の速さ，第三の次元は表出の強さである。この意味空間内の布置によると，喜びは快・速い・強い表出，悲しみはやや不快・遅い・弱い表出，怒りは不快・速い・強い表出，嫌悪は不快・速い・やや強い表出であるという。速さと強さの点で，怒りと嫌悪はやや弁別しにくい，いわば類似した感情である。越川・向後（1994）では，喜びは速く強い表出になっているが，笑顔に代表されるようないわゆる幸福感・喜びはもっと穏やかな表出であると考えられ，こうした部分が表情と音声で伝えられる感情の差異なのかも知れない。

福島・青柳（1994）は，大学生に対して中立的なメッセージをさまざまな口調で聞かせ，それがどのような感情を表現しているかを質問した。その結果，他の感情に比べ，幸福感をもった発話の理解はかなり悪いことが示された。また，声の強さと速さの変化に注目するように，という教示は，怒りの理解を促進するときにのみ有効であった。悲しみや怒りは，口調の理解がよいことから，喜びは主として表情や周りの状況に基づいて推測がなされると考えられよう。

音声表出の研究では，感情メッセージに関するものではないが，塩坪・池田・吉村（1994）が生後8週～10週の乳児が母親の言語をどのように模倣しているかをスペクトル化して検討した。その結果，乳児の発語模倣の音調が母親の音調に似ている傾向がみられたという。こうした音調の模倣は，おそらく乳児期の情動調整にも寄与していると思われる。母親が泣いている子どもをあやし，子どもがそれを模倣することは，本人の感情表出とその制御能力にも影響を与えていることが推察されるが，この分野は最近取り上げられるようになってきたテーマであり，今後の研究の発展を待たなければならない。

4．感情コミュニケーションに問題を持つ人々とその訓練

表情と音声の理解，表出に関する研究結果を総合すると，快（喜び・幸福感）については，主として表情で伝達される割合が大きく，それ以外の否定的な感情メッセージについては，口調によって伝達される割合が大きいのではないか，と考えられる。他者の感情を理解したり，自分の感情を表出する上で，文脈（状況）や言語内容といった情報以外に，表情と口調に注目する必要がある。

そこで最後に，感情を中心としたコミュニケーション能力に問題を持つ人々の特徴を述べ，コミュニケーションの教育・訓練に関して若干の提言を行いたい。どのような人々が感情の理解や表出に問題をもっているのか，包括的にこれを規定することは現段階では無理である。しかしいくつかの研究で，精神障害や発達障害を持つ人々の中には，感情によるコミュニケーションがうまくいっていない例が報告されている。以下ではそれぞれの研究を取り上げながら，感情のコミュニケーションの教育・訓練の可能性を探ることにする。

Persad & Polivy（1993）は，うつ病の患者・うつ病以外の精神病患者・抑うつ傾向の大学生・正常な大学生を対象に，表情理解の程度と傾向を調査した。その結果，うつ傾向者およびうつ病患者は，平均点としては正常者よりもやや表情理解が劣るが，個々の表情理解についての著しい理解の低下はみられなかった。しかし，うつ病患者は様々な表情を見せられたときに，正常者に比べて立ちすくんでしまう傾向がみられた。おそらく，うつ病患者は，相手の表出に対して戸惑いが見られるのではないだろか。うつ病患者に対して，提示された表情に対する感想を問うと，全体的に他者の表出に対する好意的な印象が低く，恐れを感じるという傾向がみられた。

また，正常者は怒りや嫌悪の表情に対しては不快感や気分の落ち込みがあり，抑うつ的な感情が喚起されるのに対して，うつ病以外の精神病患者は，怒りや嫌悪の表出に対してもうつ的になり難く，恐れや悲しみの表出に対しても好意的な印象をもつという結果が得られた。

これらの結果から，うつ病患者は表情表出に過度に反応して，恐れを感じ，立ちすくんでしまうのに対して，その他の精神病患者は表情に対する感受性が低く，表情を誤って理解している可能性

が示唆された。

また，自閉症児の幸福感・悲しみ・驚きの表情理解を調べたBaron-Cohen,Spitz & Cross (1993) は，自閉症児が驚きの表情を理解しにくいことを見出した。Baron-Cohen et al.(1993) は，驚きという感情が，喜びや悲しみのように，状況によって引き起こされるものではなく，予期に反していることから生じる感情であるため，他者がどのような信念を有しているのかを推測しなければならないので，自閉症児には理解が困難なのだと結論づけた。しかしBaron-Cohen et al. (1993) は，別の解釈として，自閉症児が表情の情報を正しく取り込んでいない可能性があることも指摘している。喜びや悲しみは，口元を見るだけでもある程度推測が可能であるが，驚きの表情は相手の目と口元の両方に着目しなければならないので，顔の各部の統合的な認知が困難なのではないかと述べている。

実際，自閉症児の多くは相手と視線を合わせることが少ないため，表情の情報が正しく取り込まれているかどうかも検証されていない。伊藤・平井 (1982) は，自閉症児は目のような模様を避ける傾向にあることを報告している。こうしたことから，インタラクションを行う際に，自閉症児が顔のどの部分を見ているのかを検討する研究も必要であろう。

口調などの音声情報の理解に関しては，精神遅滞者に理解の誤りがみられるという報告がある。向後・越川 (1994) は，軽度精神遅滞をもつ青年と成人を対象に，口調による感情の判断能力を検討した結果，精神遅滞者は怒りの表出を喜びの表出と誤解するケースが多いことを見出した。越川・向後 (1994) の3次元意味空間モデルによれば，喜びは快・速い・強い感情表出で，怒りは不快・速い・強い感情表出である。精神遅滞児や発達障害児の発話に多く聞かれる特徴は，強い表出で，あまり抑揚がないという点である。また，こうした子どもたちの家族内コミュニケーションを考えた場合に，親から怒りの表出が多く，障害児はこのような表出スタイルに慣れているものと考えられる。おそらく知的障害者は強い表出を肯定的と判断してしまい，音声のピッチの変化から快－不快という次元を抽出することができないのであろう。

精神分裂病者の家族のコミュニケーションについては，次のような報告がある。Leff &Vaughn (1985) は，精神分裂病者の家族には，患者に対する批判的なコメントが多いと述べている。批判的なコメントとは，言語的に明らかに相手に対する怒りや非難を表出した発言ばかりでなく，言語的な内容は単なる不満の表明であっても，口調から批判的なニュアンスが読み取れるものが含まれている。Leff & Vaughn (1985) は，こうした批判的コメントが発せられることを感情表出 (emotional expression：以下EEと略記) と呼び，家族コミュニケーションにおける高EEが分裂病の発症に寄与していると述べている。

Persad & Polivy (1993) が報告したような表情理解の誤りが，精神障害の原因であるのか，結果であるのかについては結論はでていない。しかし，精神障害をもつ人々が社会復帰するためには，他者の表情を的確に読みとり，その場にふさわしい行動をする必要がある。したがって，表情理解の訓練を行うことは有効であると思われる。また，家族から本人に対する批判的なコメントや不快な感情表出が多い高EE現象 (Leff & Vaughn, 1985) は，後に他の精神障害者の家族にも見られることが報告され，分裂病の直接の原因ではないと考えられるようになったが，少なくともコミュニケーションの障害が，家族内の偏った口調の表出パターンの経験に結びついている可能性はある。そうであるならば，さまざまな感情を音声情報で提示し，それをうまく解読する経験も必要になってこよう。

こうした，感情の情報がうまく解読できない人々が他者とコミュニケーションを持つためには，どのような教育・臨床的介入が可能であろうか。Dunn, Brown, Slomkowski, Tesla & Youngblade (1991) は，母子間や兄弟間で日常的に自分の感情状態やなぜその感情が生じたのか，といった話題を多く交わす子どもは，他者の感情推論能力が高いことを報告している。表情表出であれ音声表出であれ，まず必要なことは，表出されている感情が何であるかを言語的にラベルづけすること

である。そして，感情を分類する枠組み（カテゴリー）を構築しなければならない。

次に，表情や口調，あるいは身振りなど，どの情報に着目すればその感情が読み取れるか，すなわち社会的手がかり（social cue）への着目を促す必要がある。自閉症児や非言語性学習障害児などの場合には，特にこうした情報を取り入れる部分の訓練が大切である。たとえば上野（1993）は，社会的スキル訓練プログラムの中で表情に着目する課題を紹介している。

なお，自閉症児のように視線を合わせることが困難で，情報の入力に問題を持っている子どもたちがいる。また，非言語性学習障害児の中には，視覚的な同時処理が弱い子どもたちもいる。こうした子どもたちは，おそらく表情の統合的理解に困難をもっているので，状況と音声から感情を読み取る訓練のような，代償機能を形成していく必要があるかも知れない。

瀬尾・戸ヶ崎（1994）は，非言語性の学習障害児に対して適切なアイコンタクト（相手の方を見る）がとれるように指導を行った。その結果，自分が話しているときにはアイコンタクトは増加しなかったが，相手の話を聞いているときのアイコンタクトは増加した。おそらくこうした指導は軽度の自閉症児に対しても適用可能であろう。相手の顔（特に目元）に注目することは，感情に関する情報を取り込むために必要なことである。

精神障害者や発達障害児の音声理解については，まだ知見が少なく，どのような手がかりを聞き取るかという指導方法については，今後の研究課題である。感情表出は表情と音声によって同時に行われるので，手がかり認知を促進するためには，それぞれの成分がどの程度寄与しているのか，両者の組み合わせについての基礎研究も今後は必要になってこよう。

適切な表出の訓練に関しては，表情や音声のそれぞれの成分に分けた研究はまだない。軽度の知的障害や発達障害を持った児童のグループに対して，小林（1994b）は友だちに対して「断る」「頼む」といった場面を取り上げ，言語的に主張させるロールプレイ訓練を行った。その中には視線や抑揚が変化した事例もみられるが，すべての事例で非言語的な表出が向上したわけではない。"相手にはっきりという"という目標に重点をおきすぎると，ロールプレイ場面で相手をのぞき込みすぎたり，大げさな抑揚がつく可能性がある。どの程度の表出が適切であるのかについては，外的な基準が取りにくいこともあり，必ずしも明確ではない。コミュニケーションに障害を持っている子どもばかりでなく，子どもや成人についての適度な表出に関して，標準的なデータを収集することが先決であろう。

以上述べてきたように，感情理解・表出がうまく行かない人々に対する臨床的介入については，まだ明らかにされていない部分が多い。社会的スキル訓練の中で，非言語的な側面については，大切なことであるにも関わらず，体系的な研究と介入は行われていない。特に音声表出に関しては未知の部分が多く，これから臨床的データと共に，標準的なデータを求めるような研究が必要である。

引用文献

青木みのり 1993 二重拘束的コミュニケーションが情報処理および情動に与える影響　教育心理学研究，**41**,31-39.

Argyle,M. 1983 The contribution of social interaction research to social skills training. In Wine, J.D., & Smye, M.D. (Eds.) *Social competence*. New York:The Guilford Press. Pp.261-286.

Baron-Cohen, S.,Spitz, A., & Cross,P. 1993 Do children with autism recognize surprise? *Cognition and Emotion*,**7**, 507-516.

Bower, T.G.R. 1979 *Human development*. San Francisco:W.H.F.Freeman and Company. 鯨岡 峻（訳） ヒューマン・ディベロプメントー人間であること・人間になることー　ミネルヴァ書房

Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., Tesla, C., & Youngblade, L. 1991 Young children's understanding of other people's feelings and beliefs: Individulal differences and their antecedents. *Child Development*, **62**, 1352-1366.

Eible-Eibesfeldt, I. 1980 社会的相互作用の方法 In Raffer-Engel, W.V. (Ed.) *Aspects of nonverbal communication*. 本名信行・井出祥子・谷林真理子（編訳） ノンバーバル・コミュニケーション 大修館書店 Pp.95-133.

Ekman, P., & Friesen, W.V. 1975 *Unmasking the face*. New Jersy:Prentice-Hall. 工藤　力(訳編)表情分析入門　誠信書房, 1987

福島脩美・青柳志津子 1994 音声による感情理解の学習に関する研究,カウンセリング研究, **27**, 37-45.

Gray, J.A. 1987 *The psychology of fear and stress* (Second edition). Cambridge: Cambridge University Press.

堀毛一也 1991 社会的スキルとしての思いやり 菊池章夫（編）思いやりの心理（現代のエスプリ Vol.291）Pp.150-160.

桐田隆博 1993 表情を理解する　吉川左紀子・益谷　真・中村　真（編）　顔と心――顔の心理学入門――　サイエンス社 Pp.197-221.

越川房子・向後礼子 1994 音声の感情認知に関する予備的研究（II）――音声の意味空間における布置（1）――日本教育心理学会第36回総会発表論文集（社会 4081).

向後礼子・越川房子 1994 音声の感情認知に関する予備的研究（I）　日本教育心理学会第36回総会発表論文集（社会 4080).

石川利江・越川房子 1993 矛盾したメッセージの認知――各チャンネルの相対的効果と性差の検討――　教育心理学研究,**41**,93-98.

石川利江・浅井邦二・越川房子・竹内美香 1994 矛盾したメッセージの認知の発達的検討　日本心理学会第58回大会発表論文集（発達 1-P7).

伊藤英夫・平井　久 1982 行動異常者の諸現象III――行動学的視点――　平井　久（編）現代基礎心理学11　行動の異常　東京大学出版会 Pp.77-79.

小林　真 1994a 幼児の社会的行動における主張性と協調性の役割に関する研究　1993年度筑波大学心理学研究科博士論文.

小林　真 1994b 軽度の発達障害を持つ子どもの社会的スキル訓練――ロールプレイを用いた訓練の効果――　日本行動療法学会第20回大会発表論文集.

小林　真・松尾直博 1994 幼児の情動表出能力と社会的コンピテンス　日本教育心理学会第36回総会発表論文集（発達 2076).

Leff, J., & Vaughn, C. 1985 *Expressed emotion*. 三野善央・牛島定信（訳） 分裂病と家族の感情表出　金剛出版

Lewis, M.,Sullivan, M.W., & Vasen, A. 1987 Making faces: Age and emotion differences in the posing of emotional expressions. *Developmental Psychology*, **23**, 690-697.

水品朋子 1992 他者の感情推測の発達　1991年度筑波大学人間学類卒業論文.

Persad, S.M., & Polivy, J. 1993 Differences between depressed and non-depressed individuals in the recognition of and response to facial emotional cues. *Journal of Abnormal Psychology*, **102**, 356-368.

瀬尾亜希子・戸ヶ崎泰子 1994 非言語性ＬＤ児に対する非言語性スキルのＳＳＴの効果の検討　日本ＬＤ学会第３回大会発表論文集（B-2)

塩坪いく子・池田和夫・吉村啓子 1994 乳児期前言語行動の分析　日本発達心理学会第５回大会発表論文集（PA-61).

荘厳瞬哉 1993 情動の発達とノンバーバル行動　異常行動研究会（編）　ノンバーバル行動の実験的研究　ダーウィンからアーガイルまで　川島書店 Pp.39-59

鈴木晶夫 1991 社会的スキルと表情表出能力および表情認知能力との関連についての検討　人間科学研究, **7**, 19-26.

戸田正直 1981 情緒と行為決定　浜治世（編）『現代基礎心理学８　動機・情緒・人格』　東京大学出版会 Pp.43-67

戸田正直 1992 認知科学選書22 感情――人を動かしている適応プログラム――　東京大学出版会

上野一彦（監修） 1993 ＬＤのためのソーシャルスキル・トレーニング－ゲートウェイ社会性

開発カリキュラム（ビデオと解説書）　日本文化科学社

和田　実 1991 対人的有能性に関する研究――ノンバーバルスキル尺度とソーシャルスキル尺度の作成――　実験社会心理学研究,**31**,49-59.

山田　寛 1993 表情カテゴリーの内的関係性と顔の物理的特性　異常行動研究会（編）ノンバーバル行動の実験的研究　ダーウィンからアーガイルまで　川島書店　Pp.158-177